一構成員の半眼から見た大学

小林 一
元体芸事務区総括専門官

昭和40年代前半のあの学園紛争は何だったのか，と問いたい。あれから30年以上も経っているが，何かが変わったのだろうか。40年程大学で世話になっていながら，内から眺めるばかりだったから何がどう変わったのか自分の中では整理されない。当時，ヘルメットを被りゲバ棒を持って“〇〇粉砕”と叫んでは，学園の内外を荒廃へと追いやった連中が，あれから30年以上も経った現在，日本の社会の教育界産業界とあらゆる分野の中核を成しており，その子供達が，自分らが学園紛争を起こした年代に達している。

思うに自己中心的で，甘えた性格の“単なる人の集団”だったのか。弥生縄文のような小部落単位の国なら，成り立った話かも知れない。

しかし，この行為が文明社会と言われるようになってからの所作だったのだろうか。そういう親の背中をみて育った青年が社会に巣立ち，青少年を教育一漢字の意味するところは人間を教えて，育てて社会生活に役立つ知識訓練を与えることとある一する立場にある者がいるだろうが，近年の国の将来を憂う状況にある今こそ真剣に取り組み，力を存分に発揮すべきではなかろうか。

教育者を教育する立場にある者一つまり大学教官一が，自を磨き輝きを増してこそ，個々の存在価値，つまり大学の存在の意義がある。

国大協などが荒廃する社会を案じ，一般教育教養教育とはなにか，如何にすべきかなど議論百出。資料で目に触れるだけで雰囲気が伝わらないが，オブラートに包まれたような，お互いに気を使ったような議事録になっているようだ。お互いが意見が噛み合わないままで終らせてるから，経費の無駄使いであり，何年経っても進む道が見出せない。徒に時が流れ夜が明けないといった感じ。

こんなことを見たり聞いたりした関係者は憤ることでしょう。その気概がなくては。憤って，名誉毀損などと叫び，人の足を引張るようでは改革前進はありえないでしょう。経費と時間の浪費です。教育者たるもの自分の足元をよく見つめて，専門馬鹿にはならないようにしてもらいたい。

何もノーベル賞が全てではない。ノーベル賞受賞者が全て人間的に立派と言えますか。人間的には遥かに凌ぐ人が多いと思いませんか。

教育し教育のための研究を続けている過程において，派生的な結果が受賞対賞に選ばれるものと思う。

泰山は土壌を譲らず，故に能くその大を成す，では有りませんか。

教育基本法によれば「教育は，人格の完成をめざし，平和的な国家及び社会の形成者として，真理と正義を愛し個人の価値をたっとび勤労と責任を重んじ，自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期しておこなわなければならない。」とある。少なくとも大学構成員一人一人常に心しておれば，巣立つ学生もそれを見習い学習して青少年と接して教育していくでしょう。それを繰り返せば，時間はかかるが残忍な事件も減り，世の中は明るくなってくるでしょう。

さて目を転じて我が大学はどうか。

新構想大学として，大学を起こそうとしてたところに紛争が起こったのか紛争があったからそうなったのか定かではないが，何れにしろ，国立学校設置法が“我が筑波大学”のために改正され，昭和48年10月開学となった。当時は生めよ増やせよで，国立大学の中では，施設設備は群を抜いて恵まれていたが，現在は並みとなった。いよいよこれから。100年の計を経てなければならない。“先んずれば人を制す”です。倦むことなく前へ前へと進まなければなりません。本学が開学して四分の一世紀。

これからが【筑波大学】のスタートと考えましょう。

『エベレスト』の登山口に立ちました。さあこれからアタックです。断じて行えば鬼神もこれを避くです。

一構成員として感ずるに，箍を締めなおさなければならない。この四半世紀常に上ばかり向いて突き進んできた。この勢いは誰にも一時止めて，来た道を振り返らせることは出来なかったのだろうか。騎虎の勢い下るを得ずでしょうか。自分が若し，仮にも計画立案の出来る立場であったらどうしただろうか。

概算要求から考えてみよう。

百を越える部局からそれなりの理由を

くっつけて提出してくるが，広く浅くでなく，年初に，毎年大学の重点目標２～３点を掲げ，それにのっとって，全学あげて集中的に対文部科学省要求をする。重複する部分があれば，即座にそれを面子に拘らずに整理する。また既存の組織で，教育研究の実績の上がらないものは，スクラップアンドビルドで，改組再編し，より良き発展をする教育研究施設とすべくまとめた要求をする。教育研究の目的を的確に把握し，社会が何を必要としているか見極めたうえで，如何なる教育をすべきか，そのために如何なる研究をなすべきか，重点的，的確に判断をし，絞り込んだうえ，そのためには最小限どの程度の施設設備を必要とするのか吟味したうえ要求していく。いち早く社会が何を要求しているか把握し，時宜を得た要求を熱意をもって続ける。

例えば，外来診療棟増築要求の場合は“大学”という冠がつくから，52年の開院以来増え続ける外来患者に対応して増築が認められたし，陽子線治療施設要求についても難病であるガン治療を国をあげて取り組んでいる時期とマッチしたし，TARA センター新設要求もベンチャービジネスの話題が勢鼎としだした時期とあい，また地球温暖化・環境汚染がクローズアップされて来た折，水理実験センターの拡充整備があり，大学院大学を目指した整理統合，それに伴う授業内容の再編等々，大学をあげて取り組めば，花も咲き実も成る。

個々…構成員一人一人であったり，組織一つ一つであったり…が血を沸かせ肉を踊らせば，活性化し，“大学”の活性化が図られ，呼吸困難とはならないでしょう。一方，大学の経営…およそ“大学”として存在する全て…については，効率化にはほど遠く感じ，機能的ではなく，歯痒いと思うのは，私ばかりでしょうか。

集中管理，ピラミッド型経営は世間体はよいだろうが，各組織は自主性が充分に発揮できない状態だ。全てがピラミッドの最上部…○○審議会等…に上りつめてからようやく動きがとれる。何かを計画立案して実施しようと準備を進めていても，最上部からノーと回答があった場合，一部局では支障なく実施出来るとしても，強行することは出来ない。社会の流れから少しずつずれてゆく感じがする。

運用の妙は心に存すです。

幸いなことに，このフォーラムに投稿の機を得たので，辛辣なことを書いてますが初めての最後の機会なので，一構成員として述べさせてもらってます。

各組織が特色を出し，活性化し，国内

外から“あの大学…日本のあの大学…に行けば”と思わせるようにするためには，各学群，各センター等に，大学の理念にもとずき自治を行わせるべきでしょう。歯車ひとつずつに潤滑油が充分に染みわたれば，大学という主軸が輝きを増しながらスムーズに回転を続けるでしょう。

これは管理運営の一角を担う我々とて同様です。

中途半端な立場が，人的資産，時間的経済的に全く無駄である。

歯車一つ一つが叩き鍛えられれば，個々が力強い光を放ち，大学が，太陽が如く輝き，国内はもとより内外から〝その光〟に恩恵を受け，畏敬の念をもたれることになるでしょう。

そうあって欲しいと願うものです。

（こばやしまこと）